

羅生門的現実

「わかんねえ、何がなんだかさっぱりわかんねえ・・・」と材木売りの男が言葉をもらす場面から、映画「羅生門」は始まります。この映画は、芥川龍之介の「藪の中」を基に映画化されました。この物語は、ある夫婦が盗人にだまされ、夫が殺されるという事件が起き、その真相を巡る、七人の証言の記述によりは構成されています。

この夫を殺したのは誰だったのか。真相は藪の中。それぞれの証言は、事件に対する一人一人の解釈の表れです。同じ出来事を経験しても、各人の解釈に基づいて異なる物語ができます。こうした現実の捉え方を文化人類学者の野村は「羅生門的現実」と名付けました。

ある男性が付き合っている女性に「アルバイト代が入ったから、ご馳走するよ。何食べたい」と尋ねます。女性は「何でも」と答えます。男性は「フレンチにしようか」と言います。それを女性は断ります。男性は「じゃあ。懐石にしようか」と誘いますが、女性はまた断ります。男性は「じゃあ、ラーメン屋にしよう。おいしいところあるから」と言います。その提案を女性は断ります。提案を断り続ける女性に対し、男性は「いい加減にしろ」と怒り出し、その怒りで女性は泣きだしました。「色々提案したのに全て気に入らなかったみたいで、怒鳴ったら泣いてしまいました」と男性は困っています。一方、女性は「彼の金銭的負担を考慮していたら、最後にラーメン屋って言われ、がっかりしました。私の気持ちをわかってもらえなく、怒りだしたので悲しくなりました」と振り返りました。

男性は女性のNoをわがままと受け取り、怒りました。女性は自分の配慮が伝わらなかったことと、彼がデートにふさわしくない場所を提案したことで悲しくなりました。羅生門的現実が怒りと悲しみを引き起こしたと考えられます。では、どのようにしたらお互いの羅生門的現実を理解できるのでしょうか。怒りや悲しみを出す前に、困っていることを相手に伝えることで、お互いの状況を理解できることがあります。

ラーメン屋の提案の後、「困ったな。どこにしよう」と男性が困った顔で伝えたら、女性は金銭的にも雰囲気的にも満足できるお店を提案しやすくなるでしょう。「お財布にも、雰囲気的にもぴったりのところ探すのに困っていて」と女性が伝えたら、男性は怒らなかつたでしょう。

心配していることや困っていることを上手に相手に伝えることで、お互いが何をどのように経験しているかを理解できるようになります。困っている人に対して、人は優しくなれます。